

「救いたい心」をつむぐコミュニケーションマガジン

赤十字 NEWS

Japanese Red Cross Society NEWS

<https://www.jrc.or.jp>

令和4年5月1日(毎月1日発行) 赤十字新聞 第984号 昭和24年9月30日 第三種郵便物認可

MAY 2022 NO.984

5



わたしも赤十字

寄付の協力者

もりやす
森安ひばりさん(岐阜県高山市/9歳/小学4年生)【P.4でご紹介】

第1特集 5月は赤十字運動月間

だから私たちは、「赤十字会員」になった。

第2特集 ウクライナ人道危機

赤十字に、できること

赤十字の最新情報をSNSでチェック!



赤十字新聞 編集・発行/日本赤十字社 広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3 TEL:03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

人間を救うのは、人間だ。

 **日本赤十字社**
Japanese Red Cross Society

5月は赤十字運動月間

だから私たちは、「赤十字会員」になった。

日本赤十字社の活動は、個人会員18.2万人・法人会員8.3万法人のみなさまのご寄付によって支えられています。今回はその中から、赤十字の活動に積極的に参加されている方の声をご紹介します。



絵本「しんちゃんのランドセル」の読み聞かせをする伊勢さん

日赤新潟県支部 評議員
新潟県支部所属 赤十字ボランティア
フリーアナウンサー

伊勢 みずほさん 44歳

誰かが手を差しのべてくれる 温かい社会を赤十字さんと作りたい

日赤新潟県支部と関係が深まったのは、東日本大震災のあと、「しんちゃんのランドセル」という被災の様子を伝える絵本の制作に携わったことがきっかけでした。震災は私がBSN新潟放送アナウンサーからフリーに転身して1年後に起こりました。地震直後から、宮城県仙台市にある私の実家周辺の様子や被災地での炊き出しの活動をブログで発信していたので、新潟県支部さんの目にとまったようです。この絵本に登場するしんちゃんとその家族、幼稚園を支部さんにつなぎ、絵本をもとにした動画ではナレーターを務めました。こうしたボランティア活動を通して、赤十字社職員の強く、あたたかく、優しい行動に感動を覚えました。どんな時でも、困っている人たちのことを最優先に、困難に立ち向かう赤十字社職員の姿は私の憧れです。幼少期、私が通っていた小学校には、さまざまな背景の子どもたちがいました。障害のある子、親が亡くなったり離婚したりして寂しい思いを我慢している子、同じ子どもなのに、つらい思いをしている子たちを見て強く感じたことがあります。友達や仲間が幸せでないと、私も幸せじゃなくなる、ということ。自分一人ではなく、皆が幸せであることが大切なんだと。私自身、大きな病気をして、たくさんの方から励まされて支えられました。苦しいとき、困ったときにSOSを発することができる周りの環境も大切です。SOSを出しやすく、すぐに誰かが温かい手を差しのべてくれる、そういう社会を、赤十字さんと作ってあげれば、という思いで、赤十字さんへの支援を続けています。

伊勢さんがナレーションを務めた「しんちゃんのランドセル」 ▶ <https://youtu.be/ORP2JlbYRvw>



災害救護の最前線での活動に感謝 専門家として、後押しをしたい

以前、住んでいた静岡県で土石流災害が発生したとき(令和3年 熱海市)、私は迷わず日赤静岡県支部に寄付をしました。被害者に届く義援金ではなく、日赤支部の活動資金として。自分が寄付をしなくても義援金は集まるが、赤十字の現地での活動に目を向ける人は少ないと予想したのです。災害に関連する法制を研究する中で、過去の災害の資料にあたると、「日本赤十字社」の名称を見ないことはありません。しかし、日赤の活動は一般の方にあまり知られていない。日赤が集める義援金にしても、日赤が手数料を取っていないことや、お金の配分はその地域の「配分委員会」が実行するため時間が掛かることを私は知っていますが、教える学生にも誤解している者が多いです。

防災関係の著作が複数あるので、講演を依頼されることがあります。そういう機会を得る中で講演に参加した方々と交流して感じるのは、当事者意識を持って災害に備えること、本当の意味で命を守る行動をとることの難しさ。日赤も、防災セミナーなどの啓発事業を進める中で、同じ課題を抱えていると思います。日赤の災害救護活動を陰ながら支えつつ、社会の防災・減災の課題に向き合っていく仲間としても、支援をしていきたいですね。



日赤大阪府支部会員(有功会会員)
近畿大学 准教授(法学博士)
むらなか ようすけ
村中 洋介さん 35歳

「人を救う活動」を、共に続けていきたいから

赤十字救急法など神奈川県支部が開催する講習で、ボランティアとして指導員をしています。救急法の指導のために、海外の赤十字社に行かせてもらったこともあります。目の前で誰かが倒れた時、人を救う技術を知っていると知らないとは大違い。講習に参加すると「自分は人を救える」という自信が持てるようになります。仕事や学校の義務で救急法を学びに来た人が、最初はやる気がなさそうだったのに、帰際にはやる気に満ちた表情になっている。講習の指導員をしていて、うれしい瞬間ですね。

こういった救急法などの講習は、日本赤十字社の活動資金への寄付で成り立っていることを、初めて講習を受けた時に知りました。赤十字は世間には信頼されている団体だと思います。災害救護活動に行ったボランティア仲間が、赤十字マークを付けて活動していると周りから頼られる、赤十字マークの責任の重さを感じる、と話していましたが、こうした団体が存続するため、そして救急法などの講習を継続するためには、寄付が必要。これからも赤十字に人を救う活動を続けてほしい、そして私もその活動に参加し続けたい。これが寄付を続ける理由です。



2014年、ミャンマー赤十字社で救急法を指導する吉原さん
日赤神奈川県支部会員
神奈川県支部所属 安全赤十字奉仕団
救急法・幼児安全法・健康生活支援講習の指導員(ボランティア)

よしはら くみこ
吉原 久美子さん 44歳



救護テントを設置する川勝さん

日赤東京都支部会員
東京都支部所属 救護ボランティア
防災教育事業指導者・救急法指導員(ボランティア)

かわかつ まさひろ
川勝 正洋さん 56歳

赤十字の活動を通して、心の「手当て」を広めよう

災害時に「救い」「護る」活動に従事するから「救護ボランティア」。私は、日赤東京都支部に所属する救護ボランティアです。災害時の衣食住の部分…テント設置から始まり、炊き出しや、避難所で衛生的に暮らすための運営支援を行います。他にも、赤十字救急法や防災の講習でもボランティアの指導員をしています。

かつては献血でも協力していました。実は2015年にがんを告知され、まだ治療が続いているので今は献血ができません。将来、薬も服用しなくなれば献血もできるようになるので、そのときを楽しみに待っています。

がんの手術や闘病で、支えてもらう有り難さが身にしみました。自分よりも体の小さい看護師さんが動けない自分を支えてくれたり、たいへんお世話になったなあ、と。自分が受けた恩を、誰かに返したいという気持ちがあります。赤十字の活動に参加するのは、支え合うことに関われるからです。赤十字で学んだスキルがあるから「どうしましたか」と声を掛けられる。けがをしたら手を当てることを「手当て」と言いますが、声を掛けることは心の手当てになります。

人は一人では生きていけないです。ボランティアや指導員として貢献させてくれてありがとう、赤十字さん、これからもよろしく、という気持ちで会員をさせていただいています。

誰かのために何かしたい、その気持ちを託せるのが、赤十字

語学奉仕団の活動に携わって19年になります。高校の英語講師をしていた経験を生かしてボランティア活動をしたいとネットで検索し、日赤本社に所属する語学奉仕団(語奉)の存在を知りました。語奉の活動にはさまざまなものがありますが、私は日本語の絵本を英語に翻訳したり、病院で患者さんの通訳をする「医療通訳」に携わっています。赤十字の奉仕団として期待されますから、即戦力であり続けるために勉強も怠りません。語奉のメンバーは、フルタイムで働いているのに、勉強会にも熱心に参加されます。赤十字らしいのは、単にスキルアップの勉強会ではないのです。活動中に感じた疑問や不安、こういう場合はどう振るまえばよかったんだろうという心の在り方・考え方も話し合っ、皆で解決していく。団員の中には、青少年赤十字出身で、赤十字経験の長い方もいます。赤十字の奉仕団活動を続けていて感動するのが、出会う人、出会う人が素晴らしい、ということ。そのおかげで、「赤十字だから安心」という意識が芽生えました。今では、誰かのために何かしたいと思ったとき、夫と一緒に赤十字へ寄付をしています。



医療通訳の勉強会に参加する柴田さん(左端/※コロナ禍の様子)



日赤千葉県支部会員
日赤本社所属
赤十字語学奉仕団(ボランティア)

しばた ひさ
柴田 ひささん 76歳
正雄さん 80歳

赤十字の会員とは

会員とは日本赤十字社の目的に賛同し、支援してくださる方のことです。会員には、会費として年額2000円以上のご協力をいただくことにより個人・法人を問わず、どなたでも加入することができます。日本赤十字社の活動は、支援してくださる会員によって支えられているため、一人でも多くの方に会員になっていただけるようお願いしています。

会員になる方法について詳しくはこちら ⇒

<https://www.jrc.or.jp/about/staff/>



TOPICS

5月は赤十字運動月間「救うを託されている。」 新CMで描く“一步、踏み出す力”

赤十字運動月間のテレビCM「勇気のリレー」篇 被災地で何もできずに立ちつくすだけの青年が、行動する先輩の姿に勇気をもらい一步踏み出していくというストーリー



5月1日は日本赤十字社の前身「博愛社」の創設日、5月8日は「世界赤十字デー」です。日本赤十字社は、赤十字にゆかりある5月を「赤十字運動月間」として、毎年、赤十字への理解を深め、赤十字の活動への参加を呼び掛ける取り組みを行っています。

今年度、赤十字運動月間のテレビCMでは、抗えない出来事に打ちのめされながらも、弱さを振り払って立ち上がる青年の姿を描いています。

「危機を前に、人は弱い。」——災害が起きたとき、“自分には何もできない”と無力感を感じることもあるかもしれません。しかし、まわりの人々と力を合わせれば、困っている人・苦しんでいる人のために、できることがあります。——「でも、危機を前に、人は強い。」

救護団体である日本赤十字社は、“危機”発生時の救護活動はもとより、災害から命を守るための取り組み(防災・減災)や、災害後の復興支援など、あらゆるフェーズで「救う」活動を続けています。一人でも多くの方のご理解・ご協力をよろしくお願いいたします。

赤十字のさまざまな取り組みや
寄付支援のはじめ方などを
詳しく紹介しています。

運動月間特設サイトはこちら ▶
運動月間CM もご覧いただけます



<https://www.jrc.or.jp/lp/gekkan/>

わたしも赤十字

今月の表紙

赤十字にはさまざまな形で赤十字の活動に参加する支援者がいます。
全国の支援者の中から毎月お一人を、温かいメッセージと共にご紹介します。

一人で始めた弾き語りの募金活動。今年の春は仲間も増え、盛り上がりました！



寄付の協力者

もりやす
森安ひばりさん

岐阜県高山市／9歳／小学4年生

去年の夏休み、宿題の自由研究のテーマをお母さんと相談して、習っているギターで何かしてみたら？と言われたんです。ちょうど熱海の土石流災害をニュースで見た後でした。そうだ、熱海で困っている人のためにお金を集めよう！と思いつき、すぐにギターをつかんで家を飛び出し、駅前で「カントリーロード」を演奏しました。好きなアーティストがギターを弾いて歌う姿に憧れ、親にお願いして音楽教室に通いはじめて、4カ月。募金活動のために駅前やスーパーの前で歌わせてもらいましたが、見向きもしないで素通りしていく人もけっこういて、落ち込むことも。でも、中には、「頑張って」とジュースをくれた人や、なんと熱海から応援に来てくれた人たちがいて、うれしくて。今年の7月、熱海の災害が起きた日に、その人たちに会いに熱海に行く予定です。

ウクライナで戦争が起こって、爆弾を落とされたり多くの人々が亡くなったり、というニュースを知ったときはショックでした。今度はウクライナ

の人のために何かしたいと思い、スーパーの前で募金活動を始めたところ、同じ音楽教室の仲間も参加してくれて、多いときはメンバーが7人に。「日曜日よりの使者」をみんなで演奏すると、楽しくて、一人でやっていたときと違って疲れない！仲間とやると演奏も盛り上がり、人もどんどん集まってくれます。熱海の募金活動も、ウクライナの募金活動も、みんな幸せでいてほしい、ただそう願ってやったこと。赤十字に預けたお金が、大変な目に遭っている人たちが幸せになるために使ってもらえることを願っています！

寄付するあなたも赤十字です

- クレジットカードで寄付
- 郵便局・銀行の口座振替
- 郵便局・銀行の窓口
- お近くの日本赤十字社窓口



TOPICS

100年継承される日赤の助産師教育

1922(大正11)年5月、東京・広尾の地に日本赤十字社本部産院と産婆養成所が開設され、助産師の育成が開始されました。現在は日赤医療センター(東京・広尾)の付帯事業として運営され、今年の100周年を迎えるまでに3000人を超える助産師がここから巣立っています。

現在の日本赤十字社助産師学校は、母体救命対応総合周産期母子医療センターとして年間約3000件以上の分娩に対応する日赤医療センターを実習の場としており、実践的な学びを得られる環境が整っています。また、学生は日赤の乳児院のほか、保健所、助産所でも実習を行い、応用力も備えた助産師として、卒業後はさまざまな分野で活躍しています。

日赤が産院と産婆養成所の2施設の開設に至った背景には、その3年前に赤十字社連盟(現在の国際赤十字・赤新月社連盟:IFRC)が創設されたことが関係しています。日赤は、平時の保健事業を推進する赤十字社の連盟の一員となり、日本の乳幼児死亡率(平均14%*)が欧米に比べて著しく高いことを改善すべく、妊産婦・乳幼児保健診療機関としてこの2施設を開設しました。

産院の開院当初は、自宅分娩が主流だった時代でした。当時の記録には、産院の趣旨を周知し、妊産婦を呼び込むための苦勞と努力の様子が残されています。母体と乳児を守るために始めた事業ですが、助産師たちの呼び掛けに対し、妊婦から「産院なんて立派なところには行きづらい…」と泣かれることも。状況が一変したのは、1923(大正12)年、開設の翌年に発生した関東大震災でした。大火災となった東京で、産院は大きな被害を免れました。助産師らは自らが被災しながらも約2000人の妊産婦と乳幼児の救護に貢献。それ以降、震災から復興に向かう中でも日赤産院での出産数は急増したのです。

月日がたち、2011年の東日本大震災、2016年の熊本地震でも、赤十字の教育を受けた助産師たちが被災地で活動しました。助産師たちの赤十字の理念に基づいた非常事態での対応力は、時代を超えて受け継がれています。

*昭和6年発行「日本赤十字社産院史」より



日本赤十字社本部産院全景



「日本赤十字社本部 産院」開院当時の門



関東大震災では、敷地内にバラックを建て、罹災妊産婦を収容

献血 まるわかり 辞典

「なるほど!」と思わずひざを打つ
“献血にまつわる豆知識”を紹介する
コーナー。第2回のテーマは、血液
確保の要となる「献血ルーム」です!

vol.2



けんけつ-る-む 【献血ルーム】

イメージ激変! 今や癒やし空間に 献血ルームのビフォーアフター

今や全国に136カ所ある献血ルームですが、皆さんはどの献血ルームがお気に入りですか?

献血ルーム第1号は、1978年、雨風や採血車の駐車場所に悩まされることのない採血場を確保しようと、横浜駅西口の地下街の一角に誕生しました。当時は、血液をガラス瓶にためていたため、衛生面の観点から献血者と採血担当者の間に隔壁を設け、穴から腕を差し出すスタイルでした。

献血ルームでは開設当初から、空腹での献血で体調を崩さないよう、飲み物やビスケットなどを提供していました。少し堅いイメージが激変した理由は、例えばカフェのような空間や地域の特色に応じた空間をイメージし、少しでもリラックスできる空間を目指したことにあります。楽しんでもらえるような景観、Wi-Fiを完備するなど、快



上) 東京スカイツリータウンに隣接する東京ソラマチの10階にある献血ルーム「feel」。東京の絶景を眼下に望む、癒やし空間
下) 大阪駅から歩いてすぐの場所にある「阪急グランドビル 25 献血ルーム」は、なんと目前に大観覧車が

適性を追求し、献血ルームはかつての「近寄りたくないイメージ」を払拭した癒やしの空間へと変化を遂げました。

突如として、激しい紛争に巻き込まれた人々のために…

ウクライナ 人道危機 赤十字に、できること

難航するマリウポリ市民の救出

4月1日以来、赤十字国際委員会(ICRC)はマリウポリの市民を救出するため、昼夜を問わず市内に入ろうと試みています。これまで近づけたのは、マリウポリまであと20キロの地点。ようやく交渉が成立した4月5日、ICRCはマリウポリに隣接する都市ベルジャンシクから、1000人以上の避難者が乗るバスと自家用車の車列を、約200キロ離れたザポリージャまで先導しました。このときの避難希望者のほとんどが、自力でマリウポリから脱出してきた市民です。できるだけ多くの避難者をバスに乗せるため、バスの通路に夜通し立ったままの人もいました。

バスに乗った避難者の多くは女性、子ども、高齢者です。ペットを連れてきた方も多く、犬や猫、小鳥、カタツムリを連れてくる人も。その中に、家族をマリウポリに残し独りぼっちで乗車した14歳の少女の姿がありました。彼女は周囲の大人たちの配慮で、いち早くICRCのもとへ連れて来られました。

ICRCチームには、地雷や不発弾など放置された武器を扱う専門家や医師も含まれています。車列は、武器が残留した危険地域を通るため、トイレ休憩の際には舗装されている場所だけ歩くように注意を喚起しました。ICRCは、マリウポリの人々を安全に避難させるため、そしてマリウポリ市内に人道支援を届けるため、紛争当事者と交渉を続けています。なかなかセキュリティ上の条件が満たされず、目と鼻の先の場所で足止めされたままですが、いつでもマリウポリに入れるよう、態勢を整えています。

(4月20日時点)



避難者を乗せたバスと自家用車をザポリージャに先導する ICRC 車両



イルピンで負傷した人々に応急処置を施す ICRC スタッフ



防空壕(こう)や地下鉄の駅に隠れている数千人の人々のために食料と生活必需品を準備するウクライナ赤十字社。赤十字ボランティアも活躍

世界に広がる支援の思い… 国際赤十字が一丸となって挑む



「苦しんでいる人を救いたい」という同じ志で、それぞれの使命にまい進していた3つの赤十字機関が一丸となり、人道支援の輪を拡大させています。

ICRCは2014年以来、8年にわたり続くウクライナ紛争で犠牲となっている人々を支援してきました。

ICRCの欧州・中央アジア事業局長のマー

ティン・シェップは次のように語ります。「ICRCのスタッフは、首都キーウ(キエフ)をはじめ、南部オデーサ(オデッサ)、東部マリウポリ、ドネツク、ルハンスク、その他多くの場所に、医療品や食料、水、衛生用品を届けています。しかし、急増するニーズに対応するためには、さらに多くのことをしなければならないのは明らかです。そのため、私たちはウクライナや近隣諸国に追加のスタッフや物資を送り込み、今回の紛争で苦しんでいる人々を支援しています」

なお、日赤は、ICRCとIFRCの緊急救援アピール(資金援助要請)に対して、両方に14億1千万円ずつ、合計28億2千万円の資金援助を実施(令和4年4月25日時点)。この援助にはみなさまから寄せられた「ウクライナ人道危機救援金」が活用されています。

赤十字の国際的連帯

今、できることを。 日赤職員の支援報告

ウクライナの西側に国境を接するモルドバ共和国。欧州の中でも特に経済的に不安定な国といわれる同国には、全人口の10%を超える数のウクライナ避難民が流入しました。モルドバ赤十字社を支援するため、IFRCの要請で派遣されたのが、大阪赤十字病院の河合謙佑さんです。河合さんはネパール地震やバングラデシュ南部避難民支援など、数多くの救援活動に参加。今回のウクライナ人道危機での任務を次のように語ります。

「私は現在、モルドバで世界各地から輸送されてくる救援物資や資機材の搬入、倉庫での適切な保管管理、人々のニーズに応じた救援物資の的確な輸送手配・搬出を担当しています。現在、モルドバ赤十字社と協力し、モルドバに赤十字の救援物資の拠点を作るべく、それに適した倉庫の準備をしています。先日郊外の街へ支援物資の配布に行きました。支援を求めている人々に物資が手渡されている場面を見ると、自分に任されている業務の重要性を再認識します」

IFRCからの要請でモルドバに着任したメンバーは河合さんを含め7人。カナダ、スペイン、タジキスタンなど、7人全員の国籍と母国語が異なりますが、英語でコミュニケーションを取り、赤十字チームとして連帯を強めています。

一方、同じくウクライナの隣国・ハンガリーには今回のウクライナ人道危機に対応するための本部が設置されているIFRC欧州地域事務所があり、3月中旬、日赤本社の芳原みなみさんが同国に着任。ウクライナおよび周辺7カ国でのニーズや赤十字の活動について情報収集を行うとともに、国際赤十字と連携し、日赤からの資金・物資・人的支援を投入するための協議・調整・手配を行っています。

ハンガリー国内には、これまで43万人以上がウクライナから避難してきました(4月12日時点)。ハンガリー赤十字社は、国境近くの3カ所でヘルスケアセンターを運営、そこには医療職のボランティアが忙しい仕事の合間をぬってシフトを組み、避難者の健康を守る活動に参加しています。

国際赤十字の調査チームとして同センターを訪れた芳原さんは、「避難者のために全力で取り組んでいる地元の医療ボランティア

を、外国人である私たちが少しでも助けられる方法がないか、話し合っています」と語ります。このような状況を受け、国際赤十字はハンガリー赤十字社が実施するウクライナからの避難者に対する医療支援のサポートとして、各国赤十字社の医師・看護師を派遣することを決定しました。世界の赤十字が協力し合い、ウクライナ避難民を支える活動は続いていきます。



温かい飲み物と食べ物でウクライナ避難民を迎え入れるモルドバ赤十字社職員とボランティア



河合さんの任務は救援物資倉庫の管理業務。適切なタイミングでニーズに合った物資を届けるために、国際赤十字で必要不可欠な任務



ヘルスケアセンターでハンガリー赤十字社のボランティア・国際赤十字スタッフと協議する芳原さん(左端)



ウクライナから避難してきた人に保健医療を提供するハンガリー赤十字社の医療ボランティア

ICRC駐日代表部 インタビュー

紛争下での「赤十字マーク」 その大切な意味

赤十字国際委員会 (ICRC) 駐日代表部 広報統括官 眞壁仁美さん

ICRCはウクライナで、ロシアとの国境沿いのスームィ(スムイ)から数千人、東部沿岸部ベルジャンシクからマリウポリ市民を含む千人以上を避難誘導しました。これが実現したのは、赤十字が紛争当事者と直接交渉ができる組織だからです。

赤十字マークは、「攻撃してはならない」という意味を持ちます。国際法で

厳格に定められているため、私たちは一切武装をせず、このマークを命綱に紛争の犠牲となっている人々に寄り添うことができるのです。一般の方が、赤十字マークをむやみに使用してはならない理由もここにあります。

また、紛争当事者も赤十字マークを尊重し、政治とは離れたところで、中立で独立した人道支援ができるように便宜を図らなければなりません。ロシアもウクライナも、戦争のルールであるジュネーブ諸条約に加入しています。

その一方で、赤十字マークを付けていようがいまいが、私たち職員は安全が確保できない場所には入れません。もしも被害に遭うようなことがあれば、現場での活動が中断されます。さらに被害者を増やすことで、現場のお荷物になってしまいます。そのため、すべての紛争当事者と対話をしながら、現場のセキュリティ状況を分析して活動します。

赤十字の中立な姿勢は時に誤解を呼ぶこともありますが、敵味方の区別なく、赤十字の到着を心待ちにする人たちの所にとり着くために、とても重要なスタンスなのです。

ウクライナ人道危機

赤十字の人道支援の活動マップ

昼夜を問わずにウクライナおよび周辺国で展開されている赤十字の人道支援活動。目まぐるしく変わる情勢に赤十字も全力を挙げて対応しています。令和4年4月1日時点の赤十字の活動をマッピングしました。日本赤十字社も赤十字のネットワークを活用して、必要な救援活動が実施できるよう、常に準備しています。



【救援金の受け付け延長】
 日本赤十字社は、赤十字国際委員会(ICRC)、国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)、各国赤十字社が実施するウクライナでの人道危機対応およびウクライナからの避難民を受け入れる周辺国とその他の国々における救援活動を支援するため、海外救援金を募集しています。
 ウクライナ各地で戦闘が拡大・激化し、引き続き深刻な人道危機に直面していることから、支援の拡大および中長期の支援を見据えて、海外救援金の受け付けを延長することとしました。
 皆さまの温かいご支援をよろしくお願いたします。

「ウクライナ人道危機救援金」受け付け中
募集期間：～2022年9月30日(金)まで

From Ukraine

爆撃音の中で、95歳の誕生日を祝う

ウクライナのヘルソン地方で爆撃の音が聞こえる中、ハリーナさんは95歳の誕生日を迎えました。ウクライナ赤十字社のボランティアがハリーナさんの元を訪れ、不安と緊張の中、誕生日を一緒にお祝いすることができました。



ウクライナ避難民支援

長期化見据えた希望をつなぐ支援を

Special Message
森光玲雄 (もりみつ・れお)
 諏訪赤十字病院 臨床心理士・公認心理師
 国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)心理社会的支援センター登録専門家。
 2014年のウクライナ紛争後、IFRCの避難民支援事業でウクライナに複数回派遣され、現地調査および助言提供を担当



スロバキアの「チャイルド・フレンドリー・スペース」で遊ぶウクライナ避難民の子どもたちと赤十字ボランティア

2022年2月からの紛争激化に伴いウクライナ国内外で多くの避難民が生まれています。ウクライナでは8年前の2014年から東部の一部地域で紛争が続いており、これまでに150万人以上の市民が避難生活を余儀なくされてきました。ここでは、東部からの紛争避難民に対する支援事業に関わった経験から、当時の様子を振り返りつつ今後の支援に必要と思われることについて考えてみたいと思います。

避難生活の初期はとても過酷です。日常を突然失い生活環境の変化もめまぐるしいため、何らかのストレス反応が表れることも珍しくありません。特に紛争避難民では爆撃などの生命の危険にさらされたり、町の破壊を目の当たりにしたりと衝撃的体験をしている方も多く、私が出会ったウクライナの国内避難民

の方々も、初期は生き延びるために緊張で張り詰めていたり、わずかな音にも過敏になっている方が多くいらっしゃいました。また、子どもたちにもストレスの影響は表れます。過度に怖がる、無口になる、養育者にしがみついて離れないなど形はさまざまですが、多くの母親が「子どもが別人ようになってしまった」と心配を募らせていました。

こうした初期のストレスを和らげていくためにまず必要なのは、脅威と離れ安心して過ごせる環境を整えることです。2014年当時、現地ウクライナ赤十字社がまっ先に行った支援も、ケガの応急処置、物資や地域で使える食料クーポンの配布、住宅に関する情報提供など、生きていくことを現実的に支える取り組みでした。これらの生活支援に加えて、特に子どもには安心してできる人々と過ごし、遊びに没頭したり、体を動かしたりできる時間が欠かせません。赤十字は子どもたちがいつでも立ち寄れる拠点として「チャイルド・フレンドリー・スペース」をウクライナ各地で運営していましたが、今回の避難民対応で周辺国でもこうした活動が広がっています(上部写真参照)。子どもが子どもらしく笑顔で過ごせる姿を支えることは、母親の不安を軽減し、避難生活における希望をつなぐ効果もあります。

一から築いていくことは大きなストレスとなりえます。こうした状況を予防するため、サロン活動などの関係づくりを支援する取り組みも赤十字は行ってきました。ある高齢の避難民は「都会生活になじみず寂しさがあつたけれど、赤十字のアクティビティを通して絵を描く仲間ができた」と語ってくれました。また、慣れない土地で「自分の存在が無力に思えた」とおっしゃる方は少なくありません。ただ、新たな仕事を見つけたり、自らボランティアとして仲間を支える活動にやりがいを見出したりしながら時間をかけて意欲を回復させていく避難民の姿もたくさん目にしてきました。

このように、中長期的には、移住先での社会的つながりや役割の再獲得を支えるという視点も大切になっていきます。生活環境が安定し、新たな土地で安心できる居場所や関係性ができはじめても、ここでやっていけるかも、という希望も宿りやすくなります。また、社会活動などを通して自分にもできることがあると実感していく過程が、自分という存在への信頼を取り戻し前向きに生きる力にもつながっていきます。避難者の当事者体験はしばしば長い旅路に例えられます。ウクライナの避難民支援は長期にわたることが予測され、その長い旅路の中でさまざまな支援者が避難者の立場に立って希望をつなぐ続けていくことが大切と考えています。



ハンガリー赤十字社の支援センターでは、ウクライナの紛争から逃れた人々に宿泊施設、食事、医療サービス、社会活動を提供しています



赤十字、世界の「現場」から

supported by IFRC

国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)、赤十字国際委員会(ICRC)、日本の事業地で切り取られた1枚。知られざる世界の赤十字活動。

ベトナムの河口汽水域(淡水と海水がまじわる場所)でマングローブの植林活動を行う、赤十字の小舟。せっかく植えても、流される苗も多い。メンテナンスを繰り返し、定着させ、大きな森に育てていく。環境汚染に加え、エビなどの養殖池の造成に伴う伐採により、激減したマングローブを復活させるために。

マングローブは、高潮や津波を抑制するのに住民の命を守り、魚やエビが自然に繁殖するため生活の糧にもなる。日赤、ベトナム赤十字社、IFRCの協働で、1997年から2017年まで植林・災害対策事業が実施され、マングローブは1万408ヘクタール(東京ドーム2226個分)に拡大した。





全国各地
あなたの生活のすぐそばで
日本赤十字社の活動は
行われています。

秋田県

**「ウクライナ人道危機救援金」
全国各地で募金活動を実施!**

全国各地で「ウクライナ人道危機救援金」の募金活動が行われています。3月19日、秋田県では赤十字災害救護奉仕団が発起人となり、赤十字奉仕団、国際教養大学のボランティアを含め20人ほどで募金を呼びかけました。ウクライナの現状を知り、初めて赤十字ボランティアに参加した大学生は、「募金活動ありがとう」という募金協力者からの温かい声かけに涙ぐむ場面も。



「ウクライナ人道危機救援金」受付中
募金期間:~2022年9月30日(金)まで

山口県

**至誠館大学硬式野球部の
積極的な献血協力に表彰状**

山口県赤十字血液センターでは毎年「部活動対抗献血選手権」を開催。積極的に献血に協力した高校や大学の部活動を表彰しています。今年度は、至誠館大学の硬式野球部が大学部門で優勝しました。同校には献血バスが3回訪問し、硬式野球部員のべ105人が献血に協力。コロナ禍で企業・学校などの献血バスの受け入れ先が激減した中、献血者数の確保に大いに貢献しました。



「若いうちから献血の習慣をつけてくれたら」と血液センター長

徳島県

**子どもたちがくす玉開花!
発達障害啓発週間に思いを寄せて**

徳島県には発達障害の方に特化した全国初の集合施設「発達障がい者総合支援ゾーン」があり、徳島赤十字ひのみね総合療育センターは医療面を、徳島赤十字乳児院は子育て面での支援を担っています。今年、同ゾーンは10周年。発達障害啓発週間中の4月3日、小松島市で10周年記念式典が開催され、子どもたちと日本赤十字社徳島県支部長が、お祝いのくす玉を開花させました。



「発達障がい者総合支援ゾーン」とは →

千葉県

**「健幸教室」は満員御礼
“睡眠”の知恵をアドバイス**

3月18日、成田赤十字病院は、地域の方の健やかな毎日を願い、「健幸教室」と題したイベントをイオンモール成田と共催しました。テーマは「睡眠」。精神科認定看護師によるトークショーは満員となり、睡眠のメカニズムやより良い睡眠のコツなど、分かりやすい解説は大好評。キッズ向けの赤十字防災パネルクイズも同時開催し、子どもたちが楽しく防災知識を学びました。



専門的な内容ながら、分かりやすい解説は参加者も納得

京都府 千葉県 徳島県

**3月11日を忘れない…全国各地で
防災イベント・防災セミナーが開催!**

3月3日、京都府の宇治市立南宇治中学校で1年生を対象に赤十字防災セミナーを開催。城陽市地区赤十字奉仕団員による「災害へのそなえ」と赤十字救急指導員による応急手当を受講。地震速報が出た際の行動を考え、阪神・淡路大震災の体験を聞くなど自分ゴト化する災害学習となりました。

3月5日、千葉・イオンモール幕張新都心で催された防災イベント「家族で楽しく学ぼうさい」では、親子連れを対象にした防災ステージショーや防災クイズラリーにそれぞれ300人超が参加しました。

徳島市地区赤十字奉仕団は、東日本大震災の記憶の風化が進む中、いま一度震災から学んだ教訓を振り返るとともに、「食」の支援充実のため炊き出し訓練を実施。3月11日の訓練では、栄養バランスにも優れた「炊き込みご飯」を作りました。



救急法では止血法の実技などを学んだ



「子どもにも分かりやすい」と参加者の評判も上々



「災害用移動炊飯器」を活用した調理を実施

大阪府

**裁縫ボランティアの手作りの品
乳児院・母子支援施設に寄贈**

日赤大阪府支部の裁縫ボランティアは、毎年、心を込めて縫い上げた品を府内の乳児院・母子支援施設に寄贈しています。今年度はパジャマ、よだれかけ、リュックなど25種類、計340点を製作。ボランティアが直接届けると、施設の方から大いに喜ばれました。このほかにも、コロナ禍のマスク不足の際には、手作りマスクを生生活困窮者自立支援施設へ寄贈、その数は累計2000枚に上っています。



「喜んでいただく姿を見られてよかった」と笑顔のボランティア

**世界赤十字デー
レッドライトアッププロジェクト**

5月8日の「世界赤十字デー」を中心に、ランドマーク施設が赤十字のシンボルカラーに染まる「レッドライトアッププロジェクト」。今年は、世界で最も美しい駅と評判の「金沢駅・鼓門」(石川県)も参加。苦しみに寄り添う赤十字の精神を伝え、自然災害や情勢不安による苦難と共に乗り越えることを願い、各地で赤い光が輝きます。

【レッドライトアッププロジェクト実施(予定)施設】 ●=新規参加

青森県支部	津軽ダム	5月8日
秋田県支部	八戸市多賀多目的運動場	5月8日
山形県支部	ポートタワーセリオン	5月1日~31日
群馬県支部	常安寺 五重塔	5月6日~8日
	富岡製糸場	5月6日~9日
	草津温泉湯畑	5月7日~9日
神奈川県支部	よこまコスモワールドコスモックロク21	5月8日
	小田原城	5月8日
	小田原神社	5月8日
	横浜マリントワー	5月8日
新潟県支部	新潟日報メディアシップ	5月1日
富山県支部	株イネテック	5月1日~8日
石川県支部	金沢駅東六面口 鼓門	●5月2日~8日
福井県支部	入道の滝 救護ムゼウム	●5月1日~10日
	吉野峯観音クメセンター	5月6日~10日
山梨県支部	山梨県庁 別館	5月6日~5月11日
長野県支部	長野赤十字病院	5月1日~2日
	安曇野赤十字病院	5月1日~8日
京都府支部	京都府庁旧本館	5月8日
	舞鶴赤十字病院	5月1日~8日
兵庫県支部	京都府赤十字血液センター	5月8日
	阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター	5月5日~11日
	明石海峡大橋	5月8日
島根県支部	松江城	5月7日~5月9日
広島県支部	山陽中央テレビジョン放送株式会社(鏡)	5月7日~5月9日
山口県支部	広島城天守閣	5月6日~4日
愛媛県支部	海峽ゆめタワー	5月7日~9日
	今治国際ホテル	5月8日
	しちゅーホール(四国中央市長文化ホール)	●5月8日
高知県支部	高知城	5月8日
福岡県支部	赤坂文化館	5月6日~8日
	小倉城	5月6日~8日
	三池炭鉱歴史館	5月6日~8日
佐賀県支部	佐賀県庁	5月2日~5月31日
	久光製薬ミュージアム	●5月2日~15日/5月23日~31日
長崎県支部	福佐山山頂電波塔	5月8日
宮崎県支部	高崎銀行 本館	5月1日~14日
鹿児島県支部	株式会社山形屋	5月1日~31日

金沢駅・鼓門 写真提供:金沢市

※4月16日時点の開催予定。開催は中止になる可能性もあります。

常任理事会開催報告

令和4年4月22日、令和4年度第1回の常任理事会が開催されました。今回の常任理事会では、常任理事会の役割と運営、ウクライナ人道危機、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う対応状況(医療事業)、動画「赤十字の1年」について、それぞれ協議・報告しました。

昭憲皇太后基金

**100年たった今も受け継がれる思い
「基金」の支援先が決定**

毎年4月11日のご命日にあわせて「昭憲皇太后基金」が配分されます。この基金は、1912年に昭憲皇太后が各国赤十字社の平時事業を奨励するために寄贈された10万円(現在の3億5000万円相当)を基に創設された世界最古の人道援助基金です。今年度は16カ国の赤十字・赤新月社が手がける事業に対して、総額6260万円相当を拠出しました。第1回から第101回の今回までの累計額は20億円相当、配分先は170の国と地域にのびます。

- 【今年度、配分先となった赤十字社(例)】
- ブルキナファソ 深刻な治安悪化に直面する地域でのボランティア育成、武装勢力による被害を受けた人々や、国内避難民への支援
 - 大韓民国 バーチャルリアリティ活用の防災教育
 - コートジボワール 学校に通っていない若い女性の教育と自律支援
- ※上記含む16カ国の赤十字・赤新月社の事業に配分



昭憲皇太后が奨励された「平時における人道支援」という御心に、現在も深い敬意と感謝が寄せられています

詳細は日赤ホームページをご覧ください ▶

赤十字はじめて物語

日本赤十字社の9つの事業 その出発点にはそれぞれの「はじまり」のストーリーがありました。

vol.2 看護師教育

救護の前線に、赤十字精神を育んだ看護婦を

5月12日はナイチンゲールの誕生日、そして「看護の日」です。アンリー・デュナンは、その著書「ソルフェリノの思い出」の中で、クリミア戦争におけるナイチンゲールの活躍をたたえ、訓練された看護婦を確保する重要性を訴えました。この提言は、アンリー・デュナンらが赤十字を創設する際に重要なテーマとなり、初期の赤十字国際会議でも議題に上りました。佐野常民率いる博愛社(日赤の前身)はその考えにならい、いざというときの人員確保と救護員(看護婦)の養成のために病院を設置します。

1889年、日赤は看護婦養成規則を制定して、看護婦・救急法・治療介補などの専門教育を開始。それから2年後の1891年、濃尾地震が発生します。被災地には医師や事務員のほか、1年半の修学を終えて実務実習についたばかりの第1回生の看護婦10人を含む20人の看護婦が派遣され、被災者の救護活動にあたりました。

特設サイトでより詳しく読めます →



初の全国統一の看護婦養成教本
「看護学教程」の10カ条の教え



1896(明治29)年に日赤が発行。「温和にして患者を慰撫(いぶ)すること」など10カ条の教えが記されている

「赤十字を応援！」プレゼント パートナー企業紹介 vol.25 株式会社八天堂

西日本豪雨の被災経験から、防災・備蓄をテーマに飲料水を商品化



社会福祉法人と連携し、生活困窮者の就業訓練の場として「八天堂どう園」の運営を行う。収穫したぶどうは八天堂の販路を活用して販売する農福連携のサステナブルモデルを目指している

冷やして食べる「くりむパン」でおなじみの八天堂。昭和8年、広島県三原市にて創業し、和菓子屋、洋菓子屋、パン屋と時代に応じて業態を変え、現在は「くりむパン」をはじめ、さまざまな商品を開発・製造・販売しています。3代目の森光孝雅社長は「食」を通じて「誰もが幸せになれる」社会を目指し、社会福祉法人と連携して障害のある方の就労支援や生活困窮者の就労訓練事業に取り組むほか、地産地消の原料を使って地元の小学生と新商品を開発するなど、社会貢献活動に努めています。2016年9月には「赤十字サポーター」に認定。社資をはじめ、「ACTION! 防災・減災」など各種キャンペーンにも積極的に参加しています。2018年7月の西日本豪雨で本社や工場が被災した経験から社内で防災・備蓄の意識が高まり、飲料水の商品化に着手。今年2月より販売を開始しました。

八天堂 飛騨・高山北アルプスの天然水
おいしい水
1ケース(500mlx36本入り)
2名さまに

雪解け水が飛騨片麻岩に浸透して磨かれた、清らかな湧水。ミネラル分を多く含む、自信の新商品
商品写真はイメージです

上記プレゼント希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・WEBでご応募ください。①お名前 ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢 ⑤赤十字NEWS 5月号を手にした場所(例/献血ルーム) ⑥5月号に関するご意見・ご感想 ※ご応募いただいた個人情報はプレゼントの発送および弊社からのお知らせのみに利用いたします

郵送/〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS 5月号プレゼント係
FAX/03-6679-0785 WEB応募/右の2次元バーコードからご応募ください。
5月31日(火)必着 ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

こちらから応募できます

危機を前に、人は弱い。 でも、 危機を前に、人は強い。

災害や感染症の脅威が訪れた時。

人は不安になる。恐怖に怯える。

けれど、人は励まし合い、前に進むことができる。

私たちは知っています。

大切な人を守ろうとする姿を。

災害に立ち向かおうとする人たちの強さを。

そんな思いに応えて、ともに乗り越えていくために。

災害の現場で、赤十字の医師・看護師・ボランティアが活動をつづけます。

——— 救いを託されている。あなたとともに。



救いを託されている。

活動資金へのご協力を、よろしくお願いいたします。

赤十字運動月間 5.1(Sun)~31(Tue)

寄付するあなたも赤十字です

赤十字 寄付



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society